

# 中村 泰山（なかむら・たいざん）

## 1、プロフィール

笹鳴会に拠り俳句を作り始め、新聞「日本」に投句、河東碧梧桐と交わり俳句熱を強めた。新傾向の俳句から自由律の俳句へと進む。晩年は俳句研究を行った。

<生没>

1885(明治 18)年1月1日 ~ 1921(大正 10)年5月 22 日

<代表作>

『泰山俳句集』『泰山俳句集拾遺』

<青森との関わり>

上北郡野辺地町に生まれる。病氣療養中に俳句を作り始め、結社笹鳴会に拠る。若くして亡くなった。

## 2、作家解説

俳人。明治 18 年野辺地村(現野辺地町)城内に生まれた。本名は泰三。野辺地小に入学、卒業、弘前中学校に入学した。4年生の時八戸中学校に転校したが、卒業目前に病氣退学した。千葉県に転地療養した際に、俳句を作り始めた。帰郷後、地元の俳句結社笹鳴会に入り、野坂十二楼や山口鶯子、松本金鶏城らと競った。また新聞「日本」などにも投句した。

明治 39 年 12 月に青森入りした河東碧梧桐を、金鶏城らとともに出迎えた。

41 年1月病氣療養のため上京、静養中、碧梧桐、喜谷六花などの俳人との交遊を楽しんだ。42 年、陸奥日報社記者となったが、間もなく東奥日報社に転じた。43 年記者を辞め、野辺地町で履物屋を営んだ。

大正2年12月結婚したものの、5ヶ月で破婚。この問題を契機に立命館大学法律科に席を置いて、法律を勉強した。この間、先輩鶯子の『鶯子句集』を編集刊

行している。俳誌「懸葵」や「海紅」そして「石楠」に拠ったが、次第に伝統俳句から自由律俳句へと進んでいった。

6年7月立命館大学を卒業した泰山は、10月大阪の時事新報社に入社した。翌年12月、インフルエンザから肺結核に罹り、同病の女性と会い結婚したが、翌年妻は亡くなる。6月療養に専念するために帰郷した。その後は、俳句で多くの作品を発表し、また選者となって活躍した。9年あたりより、青森県俳句史の研究に乗り出し、10年に「青森県俳壇私録」を「東奥日報」に連載、明治時代の県俳句史を完成させた。

同年5月14日夜大咯血をし、危篤に陥り、22日辞世の一句「春の雲わが喀痰は濁りけり」を書き留め、亡くなった。泰山わずかに37歳であった。

没後、山梔子編『泰山俳句集』（昭和7年）、熊谷省三編『泰山俳句拾遺』（昭和7年）が刊行された。

### 3、資料紹介

#### ○『泰山俳句集』

図書

1932(昭和7)年1月18日

190mm×132mm

昭和7年1月18日発行で、編者は岩谷山梔子、野辺地町字城内泰山俳句集刊行会が発行している。俳句740句の他に山梔子の序文、泰山略伝がある。この句集は、主に伝統的な俳句を収め、自由律俳句は同年に発行された『泰山俳句集拾遺』に収める。